# 新訓禁

幾之部

七

津田文庫
文庫1
1604
8

早稲田大学圖書館藏書

倭訓栞前編七

洞津　谷川士清　纂

## 幾の部

き　陽神の稱よ多くいふ伊奘諾洲湯頰那藝神島伎比賣皆みな對ていふ○生をもむいふ比略生酒生絹なども比略也と藥食ま生料熟料をいふ○生酒ハ水の雜らぬをいふ西土よりも比稱ふ○生絹ハ練熟ぬを也氣ふ○樹木をもむも生比義生く無義生をいふ○木をもむ末をもとをもむよ義同し○古今集よ義てふ初てき見と文化をひきやけきし同し○俗語ま伯父き兄きをいふハきみ比略なり物語よ云ふ比あてきあるきぬきなと比名みを於ふ○ふ細なり○着ハきる比略也○服をもむを名ま同し○材ハ木ま同し神代紀ま乃ゆ今方なるを角と圓なるをまるといふ○椿をもむハ本の義と西土よ椿木の通ふり○弟第集ふり刻をもむハきを比略なり

つだ文庫

010190596155

○味さはむハ日本紀にみえたり剋にかよへり馬のうけに栽すなしといへり詞
花集にみえたり○葱さはむハ氣(いき)の義也根葱分葱刈葱なと称せり根葱を
きへくふて採べく刈て用らるへきの名也○牙ハきばの略猪のき象のき
なといふ是なり○城をきとよむハ柴の略なるへし又垣の略にや日本紀玉城
宮を古事記に玉垣宮に作れり説文に城以盛民也とみゆ柵も同し日
本紀にみえたり○杵をきとよむも擣(ツキ)の畧にや○黄ハ色にいふくちは反きな
るハ草本黄落のさまにや参河宝飯郡にきなかといふ五音の以緒皆い
とつけていへりいハいろの略なるへし○双をきと云る古語多し○酒を
いふも氣の義也御酒白酒黒酒の類也○季の訓読にいふハ春秋
二季を指ていへり○倭名抄に綺俗云岐と見え源氏にも綺を音にて
いへりかんや紙にかくのきともみえたり○鍛錬なとのきハ法華の薬
なしさる据て法を説けるといふこゝろ機ハ字の義也○琴の徽(き)に金玉を
用ゐるど蚌徽を貴ふものハ蚌ハ光彩ありて月光を得て相射るゆゑ
なりと洞天清録にみえたりされと琴賦には徽以鍾山之玉とみえたり



△きぬ

△きい　日本紀にきいとよめりいハ音のひゞきなるへし○紀伊ハもと木の国
なるを和銅年中に好字を撰て二字にかねられしよりかくなりし
伊ハ紀の音の響なり○光仁紀に天下氏姓青衣為采女耳中為紀と
みゆ耳中の義詳ならす

△きうし　杵衝の義也礼記に相とよめり注に相謂送杵声とみえたり

△きえぬ　消をよめりえ反けなり霜雪露滴の類にいふ皆是也○きえ
かへるといふハ強くいふ辞消てえに帰るといふ意なるへし

△きかり　本居の説に六帖に木折とよめり
おりかたれぬ家にいる姉かたく紫のさすらふ人を待やらん

△きかひ　祝詞に錯を古語云伎加比とみえたり桁梁なとのまちかひの所をいふなり
きかふ　日本紀に柵養とみえたり俘囚の類を柵の中に養をいふなり
通し○きかはの郡名城飼も同し

きかりぞね　続世継に神の社のまへのきかりそねなとみえたり

尓し小野なるむらの謡歌より出て紺の袴はきたる君達を
いへるは鄒をうたへし黄なる事はかるべくなり黄なる事は衣なりとも
すこしきの衣服令に無位黄袍といひて庶人も同し謡に黄服者と云り
△きゞす　雉をいふ日本紀にきゞしともあり鳴声をもて名とする成
歌し○孝徳天皇の時に白雉を献て祥瑞の始とし今の代其元を
賞するより和銅中にも但馬国より献せり○遊つるかけに封し野
深るきゞしと日本紀に見えたるは鳥立の事なり雉を野雞と称するなど
きこえたくも　神代紀に聞喜をよめりきこえふくさ事を反語とせて
かくいひて今もいふなり
ききおぼめく　聴瑩をよめり荘子の疏に聴瑩は疑惑不明之皃とみゆ
△きく　聴聞をいふ許く（きく）の義なるへし許をきくといひ許さぬをき
かぬといふ事も此書にも聴之不聴なと見えて今に聴をゆるし
とよめり不可をきかせとよむもきこえ許可せぬをいふ○聞とき
ゆるしてといふはくし反きこえてきこえての義なり又きこえてとも見ゆ



菜の効験なるをきくといふ説も国の義なるへく入
るる事ハ答ふへしまそこそへるともいふ也○臭の用ハ嗅也さるを香なりと
にきくといふハ楞厳経詩注疏なとにみえたり易牙善聞味といふにも見えて八
口にまつるもさる中ハ古名伊勢物語に聞とかくとよめり口語にも同き
口きくにきくの義一身に就てきく家用のように見ゆとも云る也○聞物部
日本紀に見ゆ豊前企救郡也舊事紀に規矩に作る後醍醐帝の時
規矩高政あり○菊ハきとくとよめり菊理姫菊池郡なと是也新
撰字鏡倭名鈔に和名をも載さす和名ハ音をもてよめり○菊をいふ
も彭白蕓蘇苦也と云り○菊をもてなせるハ漢世の事なり初め
延暦十六年に御製ありて嵯峨太上天皇重陽菊花賦経國集に
載す寛平の御時菊合させ給ひしより盛なるくなりしと云り續古
今集に聖武天皇の菊花の奇とみえたるれさるハいぶかしくそ○諺
に楚辞に梅なく万葉に菊なしと云り後水尾帝の御製
なるれきをれ撰ふにもれし菊の花ものおもふ梅の昔やハなれ

○梅と菊と酒とにつくる所は行平中納言の時須磨の野に出て植られし
ところ也行平の哥とぞ
きく咲る須磨の山里時しもあれて梅が香ぞする
千里とも思はそいらん秋毎に菊植て見る須磨の人
○菊を花の兄と称する人梅をも花の兄と称せり対へて呼ぶ菊は
万花に後るゝを花の弟とよみけれど詩なとに詠み見ゆ也○詩菊の名
は東坡詩に本けり重陽をもて此名あるらし菊家文草にも見えたり
詩菊宴ハ十月五日に行ハ村上帝の時より始る西宮記に見えたり類聚國
史延暦十六年十月癸亥曲宴酒酣皇帝歌曰
このごろの時雨の雨に菊の花ちりぞしぬべきあたら其香を
後拾遺集に
めもかれず見つゝ暮さん白菊の花よりのちの花しなければ
元稹詩に不是花中偏愛菊此花開後更無花と見えたり○ひとも
とぎくハ新勅撰集物名に見えたり續後撰に一本菊ともよめり





きくハ別種なりや○姚夷にハ春白なる菊なりといへり○菊も種類多しと
いへど單瓣重瓣有心無心旋心佛頭蜂窠の七品にして總る也といへり
近年一株にて五色を綴るに至る○伊勢物語に菊の花のうつろひ
たるを折て
紅にほふハいづら白雪の枝もとをゝにふるかとも見ゆ
こハ白菊の花すでに衰へて其英(ハナブサ)のうつろひたるをよめる也
されバかくハよめるなりといへり○菊に山路の菊名あり本草に出る苦薏
なるべし群芳譜にも菊與薏有兩種と見えたり苦薏一名野菊
而て倭に於いても称するハ馬蘭一名紫菊なり嫩葉をくらふといへり
○漢氏に老を長むる菊といひ齢を延る事を祈るにもめでたき也風俗通に見え
たる南陽の甘谷の事にやあらむ仙書に延壽客といへり月令廣義に
見えたり菊の下水をもよめり○本草に据ハ南陽の菊黄白の種あり
蒙筌に月令獨于菊曰黄花取其得時之正況當其候田野山側盛開
滿眼皆黄花也と見ゆ我邦山野自生の者ハ皆白なるをもて見る○言

陽の府中をつゝる菊をよめるは賈長房が菊酒の故事なりといへり 續齊諧記に詳也 風雅集に

万代をつむともつきし菊の花長月のけふのかざしなるらん

○菊は大やまと言葉をつくしきのかはとやまとうたにもよめりて桓武の御製に見え楚辞にも夕餐秋菊之落英と見えたり 古へよりよめり 今の野菊なるべしといへり ○夏菊あり寒菊あり大小中の品判然たり

きくらげ 木耳をいふ 木の海月の義也 倭名鈔に菓を出して岐久良介と訓せり 梗又栭も同じ 接骨木に生るを賞す

きくぢん 麴塵と書り 禮月令注に出たり 束帯色目に青色と号すと見えたり 天子の褻の御袍の色にいへり 紋黄櫨に同じ 上皇皇太子はもとより親王公卿侍臣六位已上野の行幸の時なべて用ひし麴塵を黄を帯と同じく黄をとそてなとせり 黄櫨染と称するは是なるよし餝抄に見えたるは誤なりといへり 深窓雲圖抄にも見えたり



きくすゐ 菊水の音也 荊州記に酈縣北有菊水云々 楠正成の旗の紋に用ひたるは其先橘諸兄公堰千に任し玉川の山吹を愛して直靈に水流と山吹と繡にせしをもて家紋とせり 菊は誤なりともいへり ○美濃の菊水は醴泉の故趾也 ○小陶器にいふも此より掬水也 虞裕談撰に見えたり

○菊川は遠江也 中納言宗行卿承久三年に宿の柱に書つけたる昔南陽縣之菊水汲下流延齡 今東海道之菊川宿西岸失命 太平記に光親卿とあるは誤なるべし 後甚にも下向の時にむかし此筆の跡を柱に見て一首の歌を宿の柱に書たる

いにしへもかゝる例を菊川の同じ流れに身をや沈めん

明年鎌倉葛原岡に殺さる

きくのわた 後拾遺集 源氏物語なとに見えたり 九月九日にする事也 わたをもてあり七月頃よりおほひて九月九日の大内へかくしまゐらせて後に

秋はてゝ九月の日にたちぬまへ菊の綿をきせたるもとにそてをぬらむ

一条兼良公の説に綿を菊にきせたる事いにしへよりとも見えたり

歌ふ也河まりに寒雪を防んとおもひて縛りとめてしより一書に菊居(スヱ)
といふ今は菊の枝に色綿をきせて是を造り陰陽師大黒より献るとそ
見えたり或は菊のきせ綿と称せり栄花物語に菊綿をきせさ
給たまふ時唱へさせ給ふ歌に云
ぬれてほす山路の菊の露のまにいそ我千代をへぬらん
新勅撰集に菊の露わかゆと袖ぬらして老ぬるひとそとも縛りけるとみえたり
△きごゆる 木毎に梅をわりひとせるはむべ山風を嵐といふらんの類なり
西土にも宜将愁字作秋心といへり古今集に
雪ふれは木毎に花そさきにけるいつれを梅とわきて折まし
きこしめす 日本紀に御字文所御文聞字をよみ文附けるをみきこしめすも
見えたり続日本紀に聞をきこしめすとよめり古事記祝詞式なとに聞看ともきこしめすとも万葉
集に所聞見為と書りこしをさめし又みそなはしまつしみの類にて崇むる
詞なり自ら言にも能聞得思得の語をきこしとありて一には聞しめ世の聞得へ
としとあり日本紀に不聴をきこしめさすとよめり鄙俗にきこしめすといと



いふは略語なり
きこし召を聞食(ヲス)の義万葉集に治国と請けり知し看と同じとなれり
聞と知と看(メス)と食(ヲス)と皆通へり
△きさ 倭名鈔に棗をよめり木文也と注を今いふ木目也刻むの義歟
急し○蚶をいふも貝の文をもて名くるなり今赤貝といふ肉の色赤し出羽の
きさがたも蚶潟なるべし蚶満寺なり風土記にみえ延喜式には蚶方と書
せり風景和歌浦に似たる浅き千万も相わかまりて出をなすを赤貝也といへり
○殻をとりなそせて狐を避るは音のひとつ目の音なるべく似たれば也なるべし○
象をもむも牙の標に似たる文あれば称するなるべし梵語に伽耶といふも近
後小松院応永十五年に南蛮より黒象を献せり享保十三年に蛮国より
牝牡二象を貢ぎ三歳と云象となりし翌年四月に牡象平安京に
入まいり毛洁叡覧ましまして院御製に
時をまさに此時とそを望めて見るぞひがしこきかな
○象山 象小川は吉野山の内なり

きさき　皇后をよめり君幸の義也といへり新撰字鏡に媲をよめり妃
也と注せり古へハきさち後ハ尊みて天皇に准らへ皇神とかせる故まてに妻
後后と称せし出雲風土記に阿遲須枳高日子命之后天御梶日女
命の類也○皇后の諱ハ音にて讀と台記に見えたり○職原鈔に中宮
者即皇后也本朝並置二宮太元其謂と見えて又光仁の朝に中職を置
り桓武の皇太夫人の後といへり又文武の夫人ハ聖武の皇太后にて孝謙の太后を
史に中宮と云せり○きさきがへ后りなるべき後いふあり○二代の后
と称しけるハ平家物語盛衰記などに見えたる藤原氏多子也近衛帝の時
入て女御より二条帝の時又皇后に立たまへりとて大日本史に納二太皇太
后藤原氏為皇后と書るハ其上㐮をさ志るなるべし天子无二父母の放言
も此時ありやいひそめけん

きざし　神代紀に牙をよめり氣指の義生機をいふ也牙ハ芽と同じ
機もよみ萌も訓せり皇代紀に兆もよめり

きさらぎ　二月をいふ氣更に来る義陽氣の発達する時也○二月二日
をぬ婢の交替と定めたる雲嶠類要に秦人生二一子一悪レ之乞レ與二隣家一大
富貴本家貧後以二二月二日一取レ帰後復富隣家乃貧といふ事なり
かるべしといへり

きさいべ　日本紀に私部をよめり今の姓氏に私市に作る前漢服虔注が
り私官皇后之官と見えたり訓義是也

△きし　岸をよめり水涯をいふ際石の義なるべし日本紀に研をよめり
岸と義通へり○かたきしきし綴むいつくはなとよみ新撰字鏡に
墟をきしともよめり

きじ　雉をいふきす反じ也きゞしの略也てゞ顕昭云り○春山人野を
焼て火の雉の卵を伏の處に至らんとして雌まづ翅を張て仰て地り
伏を雄数卵を含み来て雌の翅の内に在て後に雄雌の觜以啣之
て急に引去て過るハ習くさ此くて人にかくるに首を落して尾を
顕ハさいふさくて人の形を隠し迹を露さ志を雉の草むらに潜るに
喩ふるも○續日本紀に飄風折樹化為雉と見えたり○夏小正に

雉震呴とよび伯耆風土記に震動之時鶏雉悚懼則鳴踰嶺谷即樹羽蹬踊也ともいへり後にこゑを音合せとせり月令に雉入大水為蜃ともいへり是は蛟蜃なるべし○禁裡正月の式に雉の羽盛あり

きじいし 倭名鈔に礰をよめり研に同じ嵐なるものをきじいしといふ名も同じ小嵐をこぶしともいへり小礰の義也○礒打波にきじしもてといふ詞塵袋記にみえたり

きしらふ 日本紀に躁をよめりあらそふ礰に同じ宋苑物語に女房の車きしらひとあり源氏にも見ゆ軋もよめり史記の擽釜の擽も漢書に轢に作り舊讀かきならすとみえたり是もきしらふとよむあきふこそ

△きず 神代紀に瑕字又瘢字なとをよめり斬窠の義なるべし痏も疵も同じ○玉に瑕或は玷といふ新撰字鏡に玦をよめり世諺にいふは文選に玉卮無當雖寶非用の意にて淮南子に璜に考字珠に類字を用てきずとよめり○世に婦人の淫行をきずといふは普曜経に耶輸



守節無瑕とみえたり○源氏にきずをもとめ得ぬ人多くきはなるを漢書の吹毛求疵の意なり

△ぎせい 平家物語に驕なり義勢とあり今ぎせいともいへり

きせなが 着背長の義腹巻腹當なといふものにくらべて手背合ぬるか故也といへり御鎧と一物にして主位に秘むる名なりともいへり平事太平記にみえたり

△きそ 昨日の古語也万葉集に多く見えて又きぞの夜ともみえたり去年をこぞといふがごとく昨来の意なるべし日本紀にはきそといへり

きそふ 競字をよめり息添の義也きほふと同じ

きそひがり 競獵也万葉集にみゆ菜獵と同じといへり端午日競採百草とも荊楚歳時記にみえたり

△きさき 北は東の義子位なれは陽来復の意なるべし又朔をもよめり

きさ 神代紀に毀字分字を訓せり寸斬の義なるべし天武紀に布一常とみえて大殿祭祝詞に中間をなかきさとよめり

きたくち　末をあまねきていふ也てい反なるへし

きたへめ　桓武紀に問賜ひきたへめ賜へくとみえたりきたへるといふ言なるへし

きたふ　鍛煉をいふ義なりきたふといへり焼場の義にや又多識編に精鉄をきたひがねと訓ぜり新撰字鏡に鑼字をきたひ又鉢字をきたふとよめり倶に考得ず或ハ治をよめり

きたひ　新撰字鏡に腊をよみ倭名鈔に腒腊をよめりきたふの義なるへし腒ハ乾雉腊ハ乾肉とみえたり主計式に鯛腊見えたり今禁秘抄に木鯛といへるは鯖を誤る成へし又主計式に鮫鱐見ゆ鱐もきたひと訓ぜり令義解にハ腊ハ全干物也と見ゆ

きたし　日本紀に堅塩をよめり倭名鈔に俗呼黒塩為堅塩と見ゆ万葉集にハかたしほとよみたりきたしの語ハ詳ならねと今も肉を北の浜出の時国浦の漁人干鮑に塩を添て饗を此堅塩をきたしと呼ぶ○鍛字をよめる義同しかるへし北の浜をせる義へしといへり

きたなし　神代紀に汙穢をよめり直指抄に無殿の義といへるは非



なくぬさこなり○続紀宣命に岐多奈久悪奴又穢奴とみえたり○伊勢物語にきたなげなきとみえしハ奇の心をいへり

きたのかた　北方と書り搢紳の室を称せり元後法師の説に北ハ陰也故に女を北方といふといへり北堂なとも北堂に在り北の政所の称も是同し

きたのまつり　北野祭也十一月加茂臨時の祭をいふなり○北野祭ハ二月八日の釈奠も二仲也年中行事故實考に菅家を北野に祀りて子孫世々其綱をもて学曹神なるをもて聖廟の号を勅許なり其後天下に悉く菅神の像を祭る釈奠の遺風なるへしといへり続文粋に昌泰右僕射重二祖跡一以崇二霊祠一といふハ紀伝都吉祥院村堂西に聖廟あり二水記に大永二年菅大納言長者拝堂先詣二吉祥院一後詣北野社とみえたり○大将軍宗尊親王の家あり将の北野の雪の深きさまにうつりて聞えはなし将軍宮みてて御ひもの御前にかくよみ給へり

△きちやう　几帳と書り几に帳をかけたるをいふ也　新猿楽記にハ基帳とかけり

枕几帳なども几帳なるべし○神などを入て出まを神几帳といふ
○細工などの稜を消を几帳面といふ

ぎらぎら　毬杖の訛音也といふ十節録に黄帝取蚩尤頭毬之今
毬杖是之ともいふ馬上の業なり武事を習ハせ唐の代弾
撃毬を翫ひ打鞠に同し今西洋児童の弄ふあるまりぐさぐさ
うかし実行り片木を玉の如くに丸くし椎の形なる杖にて美観を
なす事多し毬杖は変風なるハなるべし毬杖は神祭の事あり
打球をもて事とせるなるべし

きらきらぼう　今昔物語に義人馬司の事にまいりそふる事にて吉祥
よ出をとぶらはせたまへとなり望喜記にもめぐる吉祥を作てと
ふらうめぐハ馬部也禁秘抄に内侍所御神楽めぐを仕ふと云る
も馬部吉祥也或ハ給丁をかく呼ふるとも云り給丁は人丁



世をいはゝ切る詞なる部丁といふも見えたり○吉祥草ハ茅をいふ祭神
の具に用ふる名なり本草に吉祥草ハ観音蘭也

△きづな　倭名抄に纏又綵をよめりなるいとゝ牽綱の義と紲も同一
今世畜家に木綱なり山椒の本をもて作るをもてきづなとす
代用といふ涅槃経に大を枷とも見えたり○馬に乗ハ騎綱に懸綱也といふ

きつく　築をつくり杵衝に用ふ出雲杵築社も同じ風土記に穂米
つくきとも云て又所造天下大神之宮将奉與諸皇神等參集宮
處杵築故云寸付といふ祝詞式神賀詞に八百丹杵築宮とあり古事
記に所ようやうにいきづきに作るとあり

きつぶ　何ぞれきつぶなどいふハ給符に音なるへし三代実録に
給籤符と云て明史に給信符勘合とあり

きつね　狐をいふ毛詩に狐狸物怪に云ふ物怪
おいきつねなどあるなり又万葉集に狐をあしきものとかりも
いふ也けつものも云り霊異記に寝ぬ事ハ鷲を作るとハ

狐ハ黄也つハ助辞狐ハ猫の略なるべし○俗ハ狐を野干と云仏
經ハ射干とかゝて狐ハ是まゝ字彙ハ豺同野犬似狐而小出胡地と
いゝ○源氏ハ狐の字なしといゝハ文集ハ狐隠蘭菊叢といゝ是なり
○大和添上郡眉間寺ハ西北ハ七疋狐とゝゝあり聖武天皇母公ハ
陵の地ハ立石ハ狐杖をつき踊る形を造りし七狐なりしゝ四个ハ
谷ハ落て破碎し三狐と存ぜしといゝ所ハ絵ハ也○城ハ繁茂ぜ
ずして忽ちすゝ父維茂見めて狐塚ハ狐ハ夢ハ狐ハ
事ハ源ハ○狐火ハ其口氣を吐とゝり或ハ撃尾出火ともゝ
ゝ火ともく燃といゝ鬼燐也○南海ハ四國及對馬五嶋ハ狐なし
北夢瑣言ハ江南無野狐とゝゝ○狐ハ虎の威をかりとゝゝ文選ハ
鼠憑社貴狐藉虎威とゝゝ○狐を稲荷乃神使とゝゝ伊勢坐
記ハ宗賀御魂神亦名專女三狐神とゝゝ二狐ハ御饌津ハ
家とゝゝ鄙俗ハ狐を專ハ神とゝゝ祟て禍を行ゝ事天狐なり
朝野僉載ハ初唐時百姓多事狐神時有諺曰無狐魅不成村とゝ



ゝゝ鳴呼愚なるかな○佛家ハ陀尼天ハ別号を白晨狐王菩薩と称を
世ハ稲荷ハ神体とゝゝ形像ハ也白狐ハ年さぐじ又たゝめハ淫
ゝゝ日本紀ハ也ゝゝ又黒狐ハ年ゝ續日本紀ハ也ゝゝ尾ハ白錢文ハ
ゝを行ゝ○狐ハ化ハ事文類聚ハ將為庭必戴髑髏拜北斗髑髏
不墜則化為人矣とゝゝ○狐ハ人ハ食ゝ事ハ絶ハ二事を云ゝ○
俗ハ狐ハ事ハ云ゝ危き事ハ狐ハ為也とゝゝ○總州漁人ハ狐ハ牝狗ハ狐ハ
子皆狐首狗身なりしとゝ○淫婦ハ百歳之狐為美女とゝゝ事集
為淫婦百歳之狐為美女とゝゝ事集
○かりよりとゝゝ人とゝゝ
文集ハ古塚野狐妖且老化為婦人顔色好見者十人八九迷とゝゝ
○玄中記ハ百歳之狐為神巫能知千里外とゝゝ筑後久留米ハ城ハ
霊狐ハ妖ハ能病患ハ吉凶を問ひ其餘禍福を
諭を掌を指ハ如し或ハ婦女となり男子ハ合交し或ハ丈夫となり

女人と交接をなす世俗の物語を多し或は狐形を化し經論を談或は乃士を密し大古に信ずれば狐も孝を報へがたし報恩を以書を以せし事信ずべし霊獣なるを知るべし

めでたしなる実なり○伽藍記に狐のをけて人の髪を截る事一百三十人を及ひしを紀せりを年も經ず又備前岡山に狐事有りし

○狐は山城の山城の狐也狐崎は張河安倍川の辺に○三野狐直

の事霊異記に見えたり○紀和歌の年に播州廉屋川の辺に牝狐

及ぶを大喰殺せり牡狐六狐と共に如をそびえ昼は寝ず

暮時まで喰合て遂に敵の如を殺せりとぞ

切腹と書り馬轡也と云り虎豹葦鹿を伐よそ制

禁ありの捨芥物なんとなり○唐川浦の辺に浮藻切腹と云ふ河曲

郡の原田村なり出なり今猶ふ浮藻を呼なり大双紙なりて

ちきつ浮けるなり

きつねつき　狐魅と書り魂人に託せる也○巳の年大蠱なりて狐魅



なりと云西土にも交廣の地を蠱なりて狐なりとぞ狐と蠱とを

宗和反せるなるべし

△きて

△きど　柵門の義なり日本紀に柵を木戸と訓ずるなり○京

造りの木戸なり蔵本戸なるもいなり

△きのう　半銭と云銭八往一寸あれば寸半と云なり

△きよ

△きぬ　絹をきぬと訓て訓とるなり海人藻芥に凡絹有二四種

謂長絹平絹細絹鹿絹なんて百錬鈍は六丈絹なんて類聚雑要に國

絹面絹凡絹八丈絹なんて行列物絹は八丈絹なんはけぬなんなり○衣をきぬと

絹は衣なるべきなるの義なり○祖を衣なるも云ふ二條家は束帯は下

なり祖を衣冠は下は衣を祖を衣なるなるなり○法華集りきぬ

なんなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなる

いとせめて　恋しく紀をよいうハ和れうれ紀とかへしてそぬふ
といふ歌なり○こぬぬ生絹也神事ニこぬ練絹と生日絹熟日練とかくこ
こぬかさ　日本紀俳名抄ニ蓋ニこもり祝詞ニ衣笠とこんゆ又華蓋と
こもり錦蓋なとといふ○葬儀ニも用ゐし○衣笠山ハ山縁葛師
郡龍安寺村の山ニ有り續紀ニ養老元年遣唐使祠神祇於蓋山之
南とこんゆ○衣笠の歌ハ相模ハ国ニ有り三浦義明ハ歌なり
こぬぐ　たのこぬぬくこぬぬくこれこれ合歓の衾を離と
各く自くれ衣を脱てふ〻くこと○こぬ〻山の帯を結ふ
めゝハ衣不着ハ裸なり
きぬれなり　俳名抄ニ裾ニこめり又こゝろとすてこめり元和小説
乃尻まて下襲とかゝる事ハ官位よりて長短有り又代くハ同じ
ゆゝしき事ハ我邦ハ西土ニ比ニ凡て裾長く隋煬帝作長裾十
二破名仙裾といふなり
△きぬ絲　新撰字鏡ニ杵をこめり多くハきとゝかりこめるハ神ハつけ



字なへ〻杵根の字神代紀ニよんでこゝろ○祢宜をこゝとゝいふ祈会の
音をこゝそ名くるなへ〻神ハこゝとゝ所なるこゝ○こゝより元和ハ月
でこゝ中ハこゝこめ又俳也絶勢弘岐屋ハ社ハ神と貴して杵ニて搗
とこゝ中ハこゝ○杵潤の姿ハ空衰記ニ見ゆ
△きぬ布　萬葉集ニ見ゆ昨日ニ日をこゝ前ハ日ハ月ニ日をひこゝ毎ニ今日
をけふこゝ中ハこゝ○こゝ中ハ孟子ニ昔者こゝ
昨日ハ家疇昔之夜ハ昨夜也影娘拾遺等ニ
われ〻ハ月日ハ陽ニこゝ中ハ人ハ中〻こゝ
きぬ〻　松茸紙ニ見ゆ木斷也字韓文ニ見ゆ搨拙と訓ぜ〻
こゝ○法師草ニ思ひんこゝ法師ハ公苦〻ニ
こゝ中ハこゝ中ハこゝ中ハこゝ中ハこゝ中ハこゝ中ハこゝ
こゝ中ハこゝ五雑組ニ世間人可貴而亦可賤可愛而亦可憎上
可以陪王公而下受辱於里閭宜不敢校者伎與僧耳とこゝ似こゝ
こゝ中ハこゝ　甲乙こゝ木ハ兄木の弟ハ弟こ十幹ハ五行ハ分こ

ものなれば丙丁等の訓義もなぞらへ知べし○十干は非情を取て天氣に屬し十二支は有情をもて地形に屬す天干と地支とを加へて六十甲子と成る

△きば　牙をいふ截齒の義也俗に糸きりばといへり又誤に日牙とよんできばを今いふおくばともいへり○木場の義も有り

△きはむ　究極をいふ萬葉集延喜式にきはみともよめり際をきはといふかしこき詞なるべしきはまりしも心はる友むく新撰字鏡に垠を八方のきはみとよめり○詩經に谷字をよめり極と音同じきをもて假借せり進退惟谷とみゆ○刀劔掛軸などにきはめといふは眞贋を推究めしるよりの詞なり

△きび　黍を訓とり黄實なりといへり○保延三年に天よりきびをふらしたりしと百家集にみゆ○倭名鈔に丹黍はあかきみ秬黍はくろきみ秫はきみのもちと訓せり○吉備の國も黍の名に出るよしいふめり今備中後の三國に分てり和名鈔に

きびのみちのくち　きびのみちのなか　きびのみちのしりともよめり

△きびし　緊をよみ新撰字鏡に緻又綣をもよめり又嚴の字をよめり和名鈔にきびしきぬなどもよめり

△きぶみ　日本紀に黄文造黄書畫師なども見えたり山谷詩に天竺黄卷といへるをもて佛書をいへるなるべし文手ニ把ニ黄卷一学ニ周孔之道一といへるは成語考に黄卷ハ總ニ謂ニ經書一といへるを見べし

△きべ　萬葉集にみゆ日本紀に柵戸とみえたり柵につきたる民戸をいふ也○鹿玉の伎倍の林は遠江國鹿玉郡に貴平村なり

△きへゆく　古事記万葉集によめり來經行の義累月の來るままに經てゆくをいふ也紀に年のきふればとも集に年をきふるともよめり

△きおふ　日本紀に競をよめり勢ひの轉也○語抄や新古今集に七月十日頃村にきおひてしとみゆ

△きさせ　ありましませの義也○きさせの山拾遺集にみゆ進

に云ふ歟なり

△きみ　神代紀に君主公侯王皇代紀に元首等とあり　古事記に夫子もあり諸冊に君と合せて君也とあり今義解に君謂天子也とあり君と周に附て諸侯なり大夫まても君と稱するなり倭訓も通しなり　儀礼注に天子諸侯及卿大夫有地者皆曰君と云ふ又かゝと通ず万葉集に神ろ神ろしまさぬと云ふ神也或ハ君に唐音也もいふ○中右記に大臣之孫子謂之君とあり○抱朴子に童名に皆君をつけて呼に白虎通に后者君也とあり○君かゝと云ふ場に公をもてかへらるゝ○古へ貴卑相通して互に云ふなり呼し音に公なり公君ともする今八親族なるへき事に云ふ也安ときみと称せしも乖違に云ふなり○光孝天皇に親王に附に臣下に君家湯ふ君しに君しめ給に独に君と云ふ也○晉書杜預傳に帝從百僚臨會拳觴屬預曰非君此橋不成と云ふなり如し○人と呼て仁と云ふなり　仁をきみとゝむに例梵書に云ふて今



元音なり○琉球に俗神を敬ふて祢も亦霊也其神をきんまと云ふ神が君に如し神が君に如し者三十三人皆酋長なり又地名にいふ八李白に思君不見下瀧洲と云ふ八君を指て其長を聞補君とのふなり○詩文に今も貴賤に別何應龍に君若思帰可便帰と云ふ八杜鵑をさせるに杜鵑をさせるに幽閑氣味深と云ふなり

梅村載筆に秀次関白に附縮百番に注せるに五山に倭衆にして吟味し加事とも云ふ事多かりに足利に元信とのひ倭船字とゝ云ふ事にて面目を失ひたるを記せり　顔真卿韻海鏡源に世本曰黄帝二臣共鼓貨狄見窾木浮而為船以避蚩尤難故船字从舟从公所謂有舟公之義舟音錢進也从止在舟上云ふなり

△きん　如絃に琴に音也きんにとも云ふなり　松苔紙にあつげ

なるとはいふなるべしと思ふ○源氏物語に琴教ふる所に琴を
とて伊勢物語にはいとうしなりと可笑げなるとかいてそこに様なるは伊勢
物語は古くハ琴の事もなくしてなるべし狹衣ハ寛和の日記とかいふ
こハ源氏をうけて書たるなれハ別に見記たるとハいふべし○源氏にこんごう
のきんぐるハ琴ハ五箇の調まて一に撥手二に片垂三に水宇瓶
四に蒼海波五に雁鳴調と河海に見えたり○孫子に鼓ハ磬乃唐音
うちなるしと例せり○俗に法囊をこんごうのふ
こんがい　絹垣とかり古事記に絶垣とかて儀式帳に生絶衣垣とも
ゆ伊勢物語に遷坐に用るとあり也○錦鞋とも倭名鈔に
こゆ或ハ錦蓋とも音まもとり
こんぐち　公等也日本紀に君王とも王宗ともあり今清華の子
息を極とかて義孫を公達とかとも
こんちやう　金打の音かとうりをそのあかしとして盟約に附男
子ハ刀をうち合女ハ袖をうち合とかり又かの物語にあり

△きめ　木目に同じ木理とかふこまかくして勝理なるもとりこあこまかなる
を緻密とかふ
△きもと　肝をいふ氣に元なるべし又木の精也とかふハ木元に同じかるべ
○信長公戰士に武男を感して肝に毛生たる為とかふる事見えたり
蒲生侯乃家法に出家たりし新著聞集に見えたり
きもむかふ　萬葉集に肝向心を推てこころと西土に心肝を對とかる例と
きもをつぶす　源氏に肝を潰すに同じ又肝を消すとも也法苑珠林
小慴然喪膽とかふこと驚魂に同じ文選に抗精とかふに出羽に俗に
肝つぶす事をおやくくとかふ急に呼り
△きやや　男ひきやハかとかりや男ハぶりし也けりまゆみ
きやも紀氏しなりやいかとかとかりやとかとかりとそ
きやら　伽羅と書り沈香に同じ奇南香是也南或ハ楠に似る
紫ぶとみとかとかに似たる木を深山岡谷に自然に枯朽を得たるなり
もとを餘木を伐て土に埋て心を用ひて交趾に上品とし遅羅を中

品々〜占城なとそ下品なる太泥ハ能水に沈めるも最下品也とそ又ま
なごんまのうとうふハ番香なるとうふ也真名班なや禪家に悪沈を速香と
ひ好香を鵬鵠班とうふ〜埃嚢抄に云こうらもに漢名也伽羅ハ黒
け梵語也陀羅尼集經云伽羅樹華嚴經云黒沈香と見ゆ季時珍も
堅黒為上とのり○天竺摩迦陀國け女人ハ頭髪并に肌膚に伽羅け油
をぬるの播列言砂け船人を流に漂流せ〜者け話也とのり今蠟油
を伽羅け油と称するハ式家よりなり大智度論に天竺國熱以身臭
故以香塗身とそこの○燕間四適に南奥島上得一木名伽羅紋如
銀屑堅如石とのるハ別なるや○伽羅貝とのるハ溝貝け細也るとのり
○伽羅木のうのひけ下に雌雄ハ雄ハ細うにつまり雌伽羅木
に集くひとへ伽羅木ハ雄木を集をみけめ〜
ぎやうえふ　優名弘鞍馬昇に杏葉緒に云行ぎやうとのり廣韻に
杏音荇とるゆ杏ハかうなる〜牛も用ふるや車け具なる
とのりそのけ多し今昇ものに乾に搏風に繪様形をなし

そのとなぎやうえふ和也ゆとのふ字とのけして造るとの極村載
筆に書るも同家如へ〜又幕け紋るとのる事埃嚢抄に見ゆ
△きよ　清きなりきよ清きやとそこのけりえる反ゆやを反ゆ
洞け自他を分てり
△きよう　清浄とのふ氣佳(イキヨ)け家如へ〜和とそこのむに雪とのり○清
修妙論に齋戒沐浴是外清浄也息心玄妙是内清浄也と見ゆ
ぎよとん　古記維時是勅とのり佛事とる而け八陣け名目訓閲集に如
孔明け八陣に魚鱗鶴翼け備を多くとのり是訓閲集に
見ゆ孔明八陣に魚麗虎翼けり武備志日本考に八蝴蝶陣長蛇陣見
とり唐大宗け帝範に夕に對魚麗之陣朝臨鶴翼之圍と魚麗を訛傳
たるなるへ〜
きよけあるる　日本紀に丹心赤心明心とそこのり清心に同〜文選注
に丹誠赤心也とそこゆ○万葉集に見ゆ
きよけなるぎさ　伊勢二見浦に見ゆ土佛參詣記に石とのふ白に見ゆ

よくむまハ白きいさご雪をあざけりて清渚の名をはらうしとかいてなぞ
石清水も前の前のつゞきの濱を末鐵とのぶ蒔田延行前
ゆり今も除服の時よこりどかく濱しさて二見ハ雜念にいふる所淨の義
ありさて祓除の事とす清渚ハ清渚に居るの名としより後撰集に
人をかるなれくまへきなくて清きなきさをいつてすゝかん
催馬樂にいせの海の清きなぎさにしほかひにとまりさ和と仁和大嘗會の
歌にいせの海のなぎさをきよみとよみ万葉集に對馬行鴻が浦まてを
志けるにき名紀さしとまるみそへ名に流しとけりくるを万葉集に
芳野川を清き河原をもよみて下水の名とまるも同し
△きよら　此ほどにいふハきらめくといふを云流然萬葉の物のきよら
かざりといふり新撰六帖に
事くしきよりの牛の角をかりきよらなるもおもしろの世や
○沿ろ服をもむとのふハ綺羅の音ぬへし年紀物語にきよらをみがくと
いふハ奇麗の音なりや神皇正統記に後鳥羽院ハ御容儀めでたくましまし



きよらなるよしれまさ給ひけるとあれとあり○吉良氏ハ水條の時よりの參河へ
きら〳〵し　神代紀に端正雄略紀に端麗繼体紀に姝妙をよめり
源氏に朝のかほのきら〳〵しくとてとあとたり新撰字鏡に嫮をよめり　文
歷くのきらともいふ
きらひもの　神代紀に吉棄物凶棄物をよめり瓜長をなへ剪棄
るをもいへり善悪祓除の事本也
△きり　霧ハいきる氣をいふ萬葉集に白氣もよみ春日
の霧流とよめり朝ぎり夕ぎり八重ぎり天津きり夏ぎり秋ぎり天
のさぎり山ぎりうき霧たつぎり浦ぎり川ぎり雲ぎりなどもあり秋の夜のむなし
て田附にわくりて前にもあり○霧の浮居霧の海霧の籬なども皆なん
よそたる詞く七夕に霧の戸ぎりとよめるも同し詩にも霧幕を作れり
和名抄にきりたる衣冠家式紀日記にかのかちきりたるあしてとい
ふハ霧をきこゆかしとる詞に源氏によみきぬきりわたれるなともいへるも
同しとらくきり風雅集より

霧ふかく霧れ如ハうをぐりてとぐべれ杉よりぞかくふく

○八雲ゆゑ霧ハ霧れ如ハ霧ハ霧れ如ハ霧ハ霧れ如ハ

△きれ　材木絹布なとの切り断なるへし莊子に百年之木破而為犧樽青黄而文之其断在溝中とあり木断を木段とも云り

△きろく　文選に高く澔汗なるを訓せりとあり弁和名抄に目を

ぎろくとあるもまぎらはしきなり

△きろく　本綿なり布帛なとも切り今世に行はるゝ西洋木太布なとあるしかるに宋史に始て種を伝へ朝鮮にも元寇の種を伝ふ新邦に天竺綿花あり波斯人国用に要物とあり紀氏語かとあり○花を蝶とのひ実を桃とのひ綿とあり本草にも桃

とあり○凡そ本綿と稀をもて家ひとし古我邦にゆてくぐる

是一種彼邦にて杜仲の一名にいひもて是一種蛮名にぬんや絲

もて是一種今代綿花布是一種なり年一種代あるなり

なるさ七八月に及桃八月代実代実を長して小也又一種なりを実

九月にて小也棉花と稀を肥沃に植れ初に紺色代綿できなり一年

みのりて結ふさ○類聚國史延暦十八年代に天竺人代をもらしたる綿種を伝へ植さ代たきなりを記せるも今代綿花なへし新撰字鏡に

安波乃わたとあるはいかゝぬ韓人代もらし綿代たるなるさ

大学衍義補に自古中國所以為衣者絲麻葛褐四者而已宋元之間始傳木綿入中國とあり○本綿代糸布綿代屑代石に化せりを播列三浦氏の佛に奥列ありしとあるを化石代ちとへからさるの又必しも久を強をして化せる代理も観に足なり奥列にて堂を建んとて第一材木為く石に化しなるも亦新とへるなり

△きわる　本草也さわる雪なとあり日本紀の雪はきわるなりと尺也

△さゝ

△さお

謙匠印